

1

[筑波大]

(1)  $\alpha\bar{z} + \bar{\alpha}z = |z|^2$  より,  $|z|^2 - \alpha\bar{z} - \bar{\alpha}z = 0$  となり,  $|z|^2 - \alpha\bar{z} - \bar{\alpha}z + \alpha\bar{\alpha} = \alpha\bar{\alpha}$  から,

$$(z - \alpha)(\bar{z} - \bar{\alpha}) = |\alpha|^2, \quad |z - \alpha|^2 = |\alpha|^2, \quad |z - \alpha| = |\alpha|$$

よって,  $z$  の描く図形  $C$  は, 点  $\alpha$  を中心とし半径が  $|\alpha|$  の円である。すなわち, 原点を通る円となる。

(2)  $\alpha$  は虚数,  $\beta$  は正の実数より,  $\beta - \bar{\alpha} = \overline{\beta - \alpha}$  である。

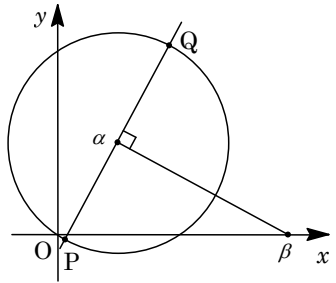
さて,  $w = (z - \alpha)(\beta - \bar{\alpha})$  とおくと,

$$w = (z - \alpha)(\beta - \bar{\alpha}) = \frac{(z - \alpha)(\overline{\beta - \alpha})(\beta - \alpha)}{(\beta - \alpha)} = \frac{z - \alpha}{\beta - \alpha} |\beta - \alpha|^2$$

ここで,  $w$  は純虚数より,  $\frac{z - \alpha}{\beta - \alpha}$  は純虚数となる。

すると,  $z$  の描く図形  $L$  は, 点  $\alpha$  を通り, 点  $\alpha$  と点  $\beta$  を結ぶ線分に垂直な直線 ( $z \neq \alpha$ ) であり,  $C$  と  $L$  は2つの共有点をもつ。この2点を  $P, Q$  とすると,  $P, Q$  は円  $C$  の直径の両端となるので,

$$PQ = 2|\alpha| = 2\sqrt{\alpha\bar{\alpha}}$$



(3)  $R(\beta)$  としたとき,  $RP = RQ$  から,  $\triangle PQR$  が正三角形になる条件は,  $\angle PQR = \frac{\pi}{3}$  より,

$$|\beta - \alpha| = \sqrt{3}|\alpha|, \quad (\beta - \alpha)(\beta - \bar{\alpha}) = 3\alpha\bar{\alpha}, \quad \beta^2 - (\alpha + \bar{\alpha})\beta - 2\alpha\bar{\alpha} = 0$$

$$\text{すると, } \beta > 0 \text{ より, } \beta = \frac{\alpha + \bar{\alpha} + \sqrt{(\alpha + \bar{\alpha})^2 + 8\alpha\bar{\alpha}}}{2} = \frac{\alpha + \bar{\alpha} + \sqrt{\alpha^2 + 10\alpha\bar{\alpha} + \bar{\alpha}^2}}{2}$$

### [解説]

現行課程で復活した複素数と図形の問題です。複素数平面上で, 円と直線の表現方法が問われています。

2

[千葉大]

(1)  $z = \cos \frac{2\pi}{7} + i \sin \frac{2\pi}{7}$  に対して,  $z^7 = \cos 2\pi + i \sin 2\pi = 1$  となり,

$$z + z^2 + z^3 + z^4 + z^5 + z^6 = \frac{z(z^6 - 1)}{z - 1} = \frac{z^7 - z}{z - 1} = \frac{1 - z}{z - 1} = -1$$

(2)  $\alpha = z + z^2 + z^4$  とするとき,  $\bar{\alpha} = \bar{z} + \bar{z}^2 + \bar{z}^4 = z^6 + z^5 + z^3$

$$\alpha + \bar{\alpha} = z + z^2 + z^4 + z^6 + z^5 + z^3 = -1$$

$$\alpha \bar{\alpha} = (z + z^2 + z^4)(z^6 + z^5 + z^3)$$

$$= z^7 + z^6 + z^4 + z^8 + z^7 + z^5 + z^{10} + z^9 + z^7$$

$$= 3 + z^6 + z^4 + z + z^5 + z^3 + z^2$$

$$= 3 - 1 = 2$$

よって,  $\alpha, \bar{\alpha}$  は 2 次方程式  $x^2 + x + 2 = 0$  の解より,

$$x = \frac{-1 \pm \sqrt{7}i}{2}$$

そして,  $\alpha$  の虚部は  $\bar{\alpha}$  の虚部より大きいので,  $\alpha = \frac{-1 + \sqrt{7}i}{2}$  である。

(3)  $x^7 = 1$  の解は,  $x = 1, z, z^2, z^3, z^4, z^5, z^6$  より,

$$x^7 - 1 = (x - 1)(x - z)(x - z^2)(x - z^3)(x - z^4)(x - z^5)(x - z^6)$$

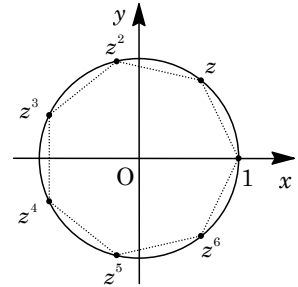
そして,  $x^7 - 1 = (x - 1)(x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1)$  より,

$$x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$$

$$= (x - z)(x - z^2)(x - z^3)(x - z^4)(x - z^5)(x - z^6) \cdots \cdots (*)$$

(\*)に  $x = 1$  を代入すると,

$$(1 - z)(1 - z^2)(1 - z^3)(1 - z^4)(1 - z^5)(1 - z^6) = 7$$



### [解説]

1 の  $n$  乗根に関する超有名問題です。解答例に示した図がすべてと言っても構わない内容です。

3

[東北大]

$$(1) P(x) = \frac{(x+i)^7 - (x-i)^7}{2i} = \frac{2({}_7C_1x^6i + {}_7C_3x^4i^3 + {}_7C_5x^2i^5 + i^7)}{2i}$$

$$= \frac{7ix^6 - 35ix^4 + 21ix^2 - i}{i} = 7x^6 - 35x^4 + 21x^2 - 1$$

ここで、 $P(x) = a_0x^7 + a_1x^6 + a_2x^5 + a_3x^4 + a_4x^3 + a_5x^2 + a_6x + a_7$  から、

$$a_0 = a_2 = a_4 = a_6 = 0, \quad a_1 = 7, \quad a_3 = -35, \quad a_5 = 21, \quad a_7 = -1$$

(2) ド・モアブルの定理を用いると、

$$P\left(\frac{\cos\theta}{\sin\theta}\right) = \frac{1}{2i} \left\{ \left(\frac{\cos\theta}{\sin\theta} + i\right)^7 - \left(\frac{\cos\theta}{\sin\theta} - i\right)^7 \right\}$$

$$= \frac{1}{2i \sin^7\theta} \{ (\cos\theta + i \sin\theta)^7 - (\cos\theta - i \sin\theta)^7 \}$$

$$= \frac{1}{2i \sin^7\theta} \{ (\cos 7\theta + i \sin 7\theta) - (\cos 7\theta - i \sin 7\theta) \}$$

$$= \frac{2i \sin 7\theta}{2i \sin^7\theta} = \frac{\sin 7\theta}{\sin^7\theta} \dots\dots\dots (*)$$

(3)  $P(x) = a_1x^6 + a_3x^4 + a_5x^2 + a_7$ ,  $Q(x) = a_1x^3 + a_3x^2 + a_5x + a_7$  より、 $x > 0$  で、

$$Q(x) = P(\sqrt{x})$$

さて、 $\theta = \frac{\pi}{7}$  のとき  $\frac{\cos\theta}{\sin\theta} > 0$ ,  $\frac{\cos 2\theta}{\sin 2\theta} > 0$ ,  $\frac{\cos 3\theta}{\sin 3\theta} > 0$  から、(\*)を用いて、

$$Q(x_1) = Q\left(\frac{\cos^2\theta}{\sin^2\theta}\right) = P\left(\left|\frac{\cos\theta}{\sin\theta}\right|\right) = P\left(\frac{\cos\theta}{\sin\theta}\right) = \frac{\sin 7\theta}{\sin^7\theta} = \frac{\sin \pi}{\sin^7\theta} = 0$$

$$Q(x_2) = Q\left(\frac{\cos^2 2\theta}{\sin^2 2\theta}\right) = P\left(\left|\frac{\cos 2\theta}{\sin 2\theta}\right|\right) = P\left(\frac{\cos 2\theta}{\sin 2\theta}\right) = \frac{\sin 14\theta}{\sin^7 2\theta} = \frac{\sin 2\pi}{\sin^7 2\theta} = 0$$

$$Q(x_3) = Q\left(\frac{\cos^2 3\theta}{\sin^2 3\theta}\right) = P\left(\left|\frac{\cos 3\theta}{\sin 3\theta}\right|\right) = P\left(\frac{\cos 3\theta}{\sin 3\theta}\right) = \frac{\sin 21\theta}{\sin^7 3\theta} = \frac{\sin 3\pi}{\sin^7 3\theta} = 0$$

さらに、 $x_1 = \frac{1}{\tan^2 \frac{\pi}{7}}$ ,  $x_2 = \frac{1}{\tan^2 \frac{2\pi}{7}}$ ,  $x_3 = \frac{1}{\tan^2 \frac{3\pi}{7}}$  なので、 $x_1, x_2, x_3$  は互いに

異なる。よって、 $x_1, x_2, x_3$  は 3 次方程式  $Q(x) = 0$  の異なる 3 つの解となり、

$$x_1 + x_2 + x_3 = -\frac{a_3}{a_1} = 5$$

### [解説]

一見、複素数の難問という構成ですが、細かな誘導のため、それに従えば最後の結論まで導けるようになっていきます。ただ、いろいろな定理が絡んでいますが。

4

[東京大]

3点  $A(1)$ ,  $B(z)$ ,  $C(z^2)$  に対し,  $\triangle ABC$  は鋭角三角形より, まず  $z \neq 1$  かつ  $z^2 \neq z$  かつ  $z^2 \neq 1$  より,

$$z \neq 0, z \neq \pm 1$$

さて,  $\angle CAB < \frac{\pi}{2}$  から,  $-\frac{\pi}{2} < \arg \frac{z^2 - 1}{z - 1} < \frac{\pi}{2}$  となり,

$$-\frac{\pi}{2} < \arg(z+1) < \frac{\pi}{2}, \quad -\frac{\pi}{2} < \arg\{z - (-1)\} < \frac{\pi}{2}$$

すると,  $z$  は点  $-1$  を通り実軸に垂直な直線の右側にある。

次に,  $\angle ABC < \frac{\pi}{2}$  から,  $-\frac{\pi}{2} < \arg \frac{z^2 - z}{1 - z} < \frac{\pi}{2}$  となり,  $-\frac{\pi}{2} < \arg(-z) < \frac{\pi}{2}$

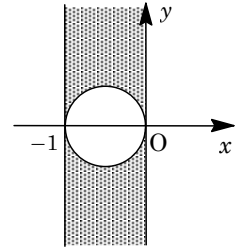
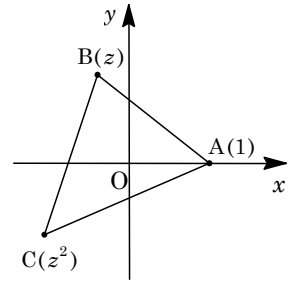
すると,  $-z$  は虚軸の右側にあるので,  $z$  は虚軸の左側にある。

さらに,  $\angle BCA < \frac{\pi}{2}$  から,  $-\frac{\pi}{2} < \arg \frac{z - z^2}{1 - z^2} < \frac{\pi}{2}$  となり,

$$-\frac{\pi}{2} < \arg \frac{z}{1+z} < \frac{\pi}{2}, \quad -\frac{\pi}{2} < \arg \frac{0-z}{-1-z} < \frac{\pi}{2}$$

すると,  $z$  は原点と点  $-1$  を直径とする円の外部にある。

以上より,  $z$  の存在範囲は右図の網点部となる。ただし, 境界線は含まない。



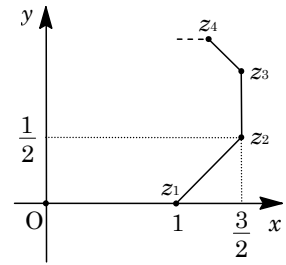
### [解説]

複素数平面についての問題です。鋭角三角形という条件を, 偏角の言葉に翻訳して処理をしました。なお, 余弦定理を利用する方法も考えられます。

5

[広島大]

- (1)  $\alpha = \frac{1+i}{2} = \frac{1}{\sqrt{2}} \left( \cos \frac{\pi}{4} + i \sin \frac{\pi}{4} \right)$  なので、点  $\alpha z$  は点  $z$  を原点回りに  $\frac{\pi}{4}$  回転し、原点との距離  $\frac{1}{\sqrt{2}}$  倍した点である。



すると、与えられた条件から、

$$z_{n+2} - z_{n+1} = \alpha(z_{n+1} - z_n) \cdots \cdots (*)$$

$$\begin{aligned} z_3 &= z_2 + \alpha(z_2 - z_1) = \frac{3+i}{2} + \frac{1+i}{2} \cdot \frac{1+i}{2} \\ &= \frac{3+i}{2} + \frac{i}{2} = \frac{3+2i}{2} \end{aligned}$$

$$z_4 = z_3 + \alpha(z_3 - z_2) = \frac{3+2i}{2} + \frac{1+i}{2} \cdot \frac{i}{2} = \frac{3+2i}{2} + \frac{-1+i}{4} = \frac{5+5i}{4}$$

- (2) (\*)より、 $z_{n+1} - z_n = (z_2 - z_1)\alpha^{n-1} = \frac{1+i}{2}\alpha^{n-1} = \alpha^n$  となり、 $n \geq 2$  で、

$$z_n = z_1 + \sum_{k=1}^{n-1} \alpha^k = 1 + \sum_{k=1}^{n-1} \alpha^k = \sum_{k=0}^{n-1} \alpha^k = \frac{1-\alpha^n}{1-\alpha}$$

$n=1$  のときも成立するので、 $z_n = \frac{1-\alpha^n}{1-\alpha}$  である。

- (3)  $n \rightarrow \infty$  のとき  $|\alpha^n| = |\alpha|^n = \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^n \rightarrow 0$  より、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \alpha^n = 0$  となり、

$$w = \lim_{n \rightarrow \infty} z_n = \frac{1}{1-\alpha} = \frac{2}{1-i} = 1+i$$

- (4) (2)より、 $z_n = \frac{1-\alpha^n}{1-\alpha} = (1+i)(1-\alpha^n) = (1+i) \left\{ 1 - \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^n \left( \cos \frac{n}{4}\pi + i \sin \frac{n}{4}\pi \right) \right\}$

ここで、 $z_n$  の実部が  $w$  の実部 1 より大きくなることより、

$$1 - \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^n \cos \frac{n}{4}\pi + \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^n \sin \frac{n}{4}\pi > 1, \quad \sin \frac{n}{4}\pi - \cos \frac{n}{4}\pi > 0$$

すると、 $\sqrt{2} \sin\left(\frac{n}{4} - \frac{1}{4}\right)\pi > 0$  となるので、 $k$  を 0 以上の整数として、

$$2k\pi < \left(\frac{n}{4} - \frac{1}{4}\right)\pi < (2k+1)\pi, \quad 8k+1 < n < 8k+5$$

よって、 $n = 8k+2, 8k+3, 8k+4$  である

### [解説]

複素数平面上の点の移動を題材にした頻出問題です。現行課程で復活し、日も浅いためなのか、問題文の説明が度を超えた丁寧さです。

6

[筑波大]

- (1)  $|z-1|=|z+1|$ ……①に対して、左辺は点  $z$  と点 1 との距離、右辺は点  $z$  と点  $-1$  との距離を表す。

これより、①を満たす点  $z$  の全体は、点 1 と点  $-1$  を結ぶ線分の垂直二等分線、すなわち虚軸となる。

- (2)  $w = \frac{z+1}{z}$  ( $z \neq 0$ ) より、 $wz = z+1$  となり、 $(w-1)z = 1$  ……②

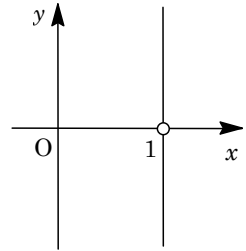
ここで、 $w=1$  とすると②は成立しないので、 $w \neq 1$  で  $z = \frac{1}{w-1}$  ……③

③を①に代入すると、 $|\frac{1}{w-1}-1|=|\frac{1}{w-1}+1|$  となり、 $|\frac{2-w}{w-1}|=|\frac{w}{w-1}|$  から、

$$\frac{|2-w|}{|w-1|} = \frac{|w|}{|w-1|}, \quad |2-w|=|w|$$

すると、点  $z$  が原点を除いた虚軸上を動くとき、点  $w$  は点 2 と点 0 を結ぶ線分の垂直二等分線、すなわち点 1 を通り実軸に垂直な直線上を動く。ただし  $w \neq 1$  から点 1 は除く。

図示すると、右図のようになる。



- (3)  $a > 0$  で  $w = \frac{z+1}{z-a}$  より、 $w(z-a) = z+1$  となり、 $(w-1)z = aw+1$  ……④

ここで、 $w=1$  とすると④は成立しないので、 $w \neq 1$  で  $z = \frac{aw+1}{w-1}$  ……⑤

⑤を①に代入すると、 $|\frac{aw+1}{w-1}-1|=|\frac{aw+1}{w-1}+1|$  となり、

$$\left| \frac{(a-1)w+2}{w-1} \right| = \left| \frac{(a+1)w}{w-1} \right|, \quad |(a-1)w+2| = |(a+1)w|$$

両辺を 2 乗して、 $|(a-1)w+2|^2 = (a+1)^2 |w|^2$  より、

$$\{(a-1)w+2\}\{(a-1)\bar{w}+2\} = (a+1)^2 w\bar{w}$$

$$4aw\bar{w} - 2(a-1)w - 2(a-1)\bar{w} = 4, \quad w\bar{w} - \frac{a-1}{2a}w - \frac{a-1}{2a}\bar{w} = \frac{1}{a} \dots\dots\dots⑥$$

⑥より、 $(w - \frac{a-1}{2a})(\bar{w} - \frac{a-1}{2a}) = \frac{1}{a} + \frac{(a-1)^2}{4a^2}$  となり、

$$\left| w - \frac{a-1}{2a} \right|^2 = \frac{(a+1)^2}{4a^2}, \quad \left| w - \frac{a-1}{2a} \right| = \frac{a+1}{2a}$$

よって、点  $z$  が虚軸上を動くとき、点  $w$  は中心  $\frac{a-1}{2a}$  で半径  $\frac{a+1}{2a}$  の円を描く。ただし、 $w \neq 1$  から点 1 は除く。

### [解説]

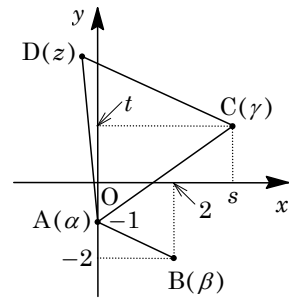
複素数平面上の変換を問う問題です。(1)において、まず①を変形して、 $z + \bar{z} = 0$  という関係を導き、この式をもとに(2)、(3)を解くという方法もあります。

7

[熊本大]

- (1)  $\alpha = -i$ ,  $\beta = 2 - 2i$ ,  $\gamma = s + ti$  ( $s > 0$ ,  $t > 0$ ) に対し、複素数平面上に  $A(\alpha)$ ,  $B(\beta)$ ,  $C(\gamma)$  をとる。

ここで、 $\triangle ACD$  が正三角形で、点  $D$  が直線  $AC$  に関して  $B$  と反対側にあることより、 $D(z)$  は  $C(\gamma)$  を  $A(\alpha)$  のまわりに  $\frac{\pi}{3}$  だけ回転した点となり、



$$z - \alpha = \left( \cos \frac{\pi}{3} + i \sin \frac{\pi}{3} \right) (\gamma - \alpha)$$

$$\begin{aligned} z &= -i + \frac{1}{2}(1 + \sqrt{3}i)\{s + (t+1)i\} = -i + \frac{1}{2}\{s - \sqrt{3}t - \sqrt{3} + (\sqrt{3}s + t + 1)i\} \\ &= \frac{1}{2}(s - \sqrt{3}t - \sqrt{3}) + \frac{1}{2}(\sqrt{3}s + t - 1)i \cdots \cdots (*) \end{aligned}$$

- (2) 与えられた条件  $4(\beta - \alpha)^2 + (\gamma - \alpha)^2 - 2(\beta - \alpha)(\gamma - \alpha) = 0$  より、

$$4 + \left( \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} \right)^2 - 2 \cdot \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = 0, \quad \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = 1 \pm \sqrt{3}i$$

ここで、 $AC$  は  $AB$  を正の向きに回転したものであるから、 $\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = 1 + \sqrt{3}i$  となり、

$$\gamma = \alpha + (1 + \sqrt{3}i)(\beta - \alpha) = -i + (1 + \sqrt{3}i)(2 - i) = 2 + \sqrt{3} + (-2 + 2\sqrt{3})i$$

すると、 $s = 2 + \sqrt{3}$ ,  $t = -2 + 2\sqrt{3}$  となるので、(\*)から、

$$\begin{aligned} z &= \frac{1}{2}(2 + \sqrt{3} + 2\sqrt{3} - 6 - \sqrt{3}) + \frac{1}{2}(2\sqrt{3} + 3 - 2 + 2\sqrt{3} - 1)i \\ &= -2 + \sqrt{3} + 2\sqrt{3}i \end{aligned}$$

- (3) まず、 $xy$  平面を対応させて、 $A(0, -1)$ ,  $B(2, -2)$ ,  $C(2 + \sqrt{3}, -2 + 2\sqrt{3})$ ,  $D(-2 + \sqrt{3}, 2\sqrt{3})$  とおくと、

$$\overrightarrow{AC} = (2 + \sqrt{3}, -1 + 2\sqrt{3}), \quad \overrightarrow{BD} = (-4 + \sqrt{3}, 2 + 2\sqrt{3})$$

すると、 $\overrightarrow{AC}$  と  $\overrightarrow{BD}$  のなす角が  $\theta$  となり、

$$|\overrightarrow{AC}| = \sqrt{(2 + \sqrt{3})^2 + (-1 + 2\sqrt{3})^2} = 2\sqrt{5}$$

$$|\overrightarrow{BD}| = \sqrt{(-4 + \sqrt{3})^2 + (2 + 2\sqrt{3})^2} = \sqrt{35}$$

$$\overrightarrow{AC} \cdot \overrightarrow{BD} = (2 + \sqrt{3})(-4 + \sqrt{3}) + (-1 + 2\sqrt{3})(2 + 2\sqrt{3}) = 5$$

よって、 $\cos \theta = \frac{5}{2\sqrt{5} \cdot \sqrt{35}} = \frac{1}{2\sqrt{7}} = \frac{\sqrt{7}}{14}$  である。

### [解説]

複素数平面に関する標準的な問題です。(3)は慣れ親しんでいる  $xy$  平面を対応させ、ベクトルの内積を利用しています。

8

[東北大]

(1)  $z\bar{z} + \alpha z + \beta\bar{z} + \gamma = 0 \cdots \cdots (*)$  に対して、共役複素数をとると、

$$\bar{z}z + \bar{\alpha}z + \bar{\beta}z + \bar{\gamma} = 0 \cdots \cdots (**)$$

(\*)と(\*\*)の両辺の差をとると、 $(\alpha - \bar{\beta})z - (\bar{\alpha} - \beta)\bar{z} + \gamma - \bar{\gamma} = 0 \cdots \cdots \textcircled{1}$ (2)  $\gamma$  は実数なので  $\gamma = \bar{\gamma}$  となり、 $\textcircled{1}$  より、

$$(\alpha - \bar{\beta})z - (\bar{\alpha} - \beta)\bar{z} = 0, (\alpha - \bar{\beta})z = (\bar{\alpha} - \beta)\bar{z} \cdots \cdots \textcircled{2}$$

すると、 $\textcircled{2}$  から  $(\alpha - \bar{\beta})z = (\bar{\alpha} - \beta)\bar{z}$  となり、 $(\alpha - \bar{\beta})z$  は実数である。そこで、 $k$  を実数として、 $(\alpha - \bar{\beta})z = k \cdots \cdots \textcircled{3}$  とおく。(i)  $\alpha - \bar{\beta} = 0$  のとき(\*)から、 $z\bar{z} + \beta\bar{z} + \beta\bar{z} + \gamma = 0$  となるので、

$$(z + \beta)(\bar{z} + \bar{\beta}) - \beta\bar{\beta} + \gamma = 0, |z + \beta|^2 = |\beta|^2 - \gamma$$

ここで、 $\gamma$  は負の実数なので  $|\beta|^2 - \gamma > 0$  となり、 $|z + \beta| = \sqrt{|\beta|^2 - \gamma}$ すると、複素数平面上で、点  $z$  は点  $-\beta$  を中心とする半径  $\sqrt{|\beta|^2 - \gamma}$  の円周上の点となり、無数に存在する。これより、 $z$  がちょうど 2 個あることに反する。(ii)  $\alpha - \bar{\beta} \neq 0$  のとき $\textcircled{3}$  から、 $z = \frac{k}{\alpha - \bar{\beta}} = \frac{k}{|\alpha - \bar{\beta}|^2}(\bar{\alpha} - \beta)$  となり、(\*)に代入すると、

$$\frac{k^2}{|\alpha - \bar{\beta}|^2} + \alpha \cdot \frac{k}{|\alpha - \bar{\beta}|^2}(\bar{\alpha} - \beta) + \beta \cdot \frac{k}{|\alpha - \bar{\beta}|^2}(\alpha - \bar{\beta}) + \gamma = 0$$

$$k^2 + k\alpha(\bar{\alpha} - \beta) + k\beta(\alpha - \bar{\beta}) + \gamma|\alpha - \bar{\beta}|^2 = 0$$

ここで、 $|\alpha| = |\beta| \neq 0$  から  $\alpha\bar{\alpha} = \beta\bar{\beta}$  なので、 $k^2 + \gamma|\alpha - \bar{\beta}|^2 = 0$  となり、 $-\gamma > 0$ 、 $|\alpha - \bar{\beta}| > 0$  より、

$$k = \pm\sqrt{-\gamma}|\alpha - \bar{\beta}|$$

そして、この値を  $k = k_1, k_2 (k_1 < k_2)$  とおくと、 $z = \frac{k_1}{\alpha - \bar{\beta}}, \frac{k_2}{\alpha - \bar{\beta}}$  となる。(i)(ii)より、 $z$  がちょうど 2 個あるための必要十分条件は  $\alpha - \bar{\beta} \neq 0$  である。

## [解説]

複素数に関する標準的な問題です。(1)で導いた式が(2)へのスムーズな誘導になっています。



9

[京都大]

(1)  $w + \frac{1}{w} = x + yi$  ……①に対し,  $|w| = R$  ( $R > 1$ ) のとき,  $\theta$  を任意の実数として,

$$w = R(\cos \theta + i \sin \theta) \dots\dots\dots ②$$

①②より,  $x + yi = R(\cos \theta + i \sin \theta) + \frac{1}{R}\{\cos(-\theta) + i \sin(-\theta)\}$  となり,

$$x + yi = \left(R + \frac{1}{R}\right)\cos \theta + i\left(R - \frac{1}{R}\right)\sin \theta$$

$$x = \left(R + \frac{1}{R}\right)\cos \theta \dots\dots\dots ③, \quad y = \left(R - \frac{1}{R}\right)\sin \theta \dots\dots\dots ④$$

③より  $\cos \theta = \frac{R}{R^2 + 1}x$ , ④より  $\sin \theta = \frac{R}{R^2 - 1}y$  なので,

$$\left(\frac{R}{R^2 + 1}\right)^2 x^2 + \left(\frac{R}{R^2 - 1}\right)^2 y^2 = 1 \dots\dots\dots ⑤$$

よって, 点  $(x, y)$  の軌跡は, ⑤で表される楕円である。

(2)  $\arg w = \alpha$  ( $0 < \alpha < \frac{\pi}{2}$ ) のとき,  $r$  を正の実数として,

$$w = r(\cos \alpha + i \sin \alpha) \dots\dots\dots ⑥$$

(1)と同様にすると, ①⑥より,  $x + yi = \left(r + \frac{1}{r}\right)\cos \alpha + i\left(r - \frac{1}{r}\right)\sin \alpha$  となり,

$$x = \left(r + \frac{1}{r}\right)\cos \alpha \dots\dots\dots ⑦, \quad y = \left(r - \frac{1}{r}\right)\sin \alpha \dots\dots\dots ⑧$$

⑦より  $r + \frac{1}{r} = \frac{x}{\cos \alpha}$ , ⑧より  $r - \frac{1}{r} = \frac{y}{\sin \alpha}$  となり,

$$2r = \frac{x}{\cos \alpha} + \frac{y}{\sin \alpha} \dots\dots\dots ⑨, \quad \frac{2}{r} = \frac{x}{\cos \alpha} - \frac{y}{\sin \alpha} \dots\dots\dots ⑩$$

すると, ⑨⑩より,

$$\left(\frac{x}{\cos \alpha} + \frac{y}{\sin \alpha}\right)\left(\frac{x}{\cos \alpha} - \frac{y}{\sin \alpha}\right) = 4, \quad \frac{x^2}{4 \cos^2 \alpha} - \frac{y^2}{4 \sin^2 \alpha} = 1 \dots\dots\dots ⑪$$

ここで,  $r > 0$  から,  $r + \frac{1}{r} \geq 2\sqrt{r \cdot \frac{1}{r}} = 2$ , また  $r - \frac{1}{r}$  は任意の値をとる。

すると,  $\cos \alpha > 0$ ,  $\sin \alpha > 0$  で, ⑦から  $x \geq 2 \cos \alpha$ , ⑧から  $y$  は任意の値をとる。

以上より, 点  $(x, y)$  の軌跡は, ⑪で表される双曲線である。ただし,  $x \geq 2 \cos \alpha$  の部分である。

### [解説]

複素数と軌跡に関する標準的な問題です。なお, (2)では  $x$  に限界があり, 軌跡は双曲線の右の枝になります。

10

[東京大]

(1) 条件より、 $z \neq 0$  のとき  $w = \frac{1}{z}$  から、 $z = \frac{1}{w}$  ( $w \neq 0$ ) ……①

さて、点  $z$  が点  $\alpha$  ( $\alpha \neq 0$ ) と原点  $O$  を結ぶ線分の垂直二等分線  $L$  上を動くとき、

$$|z| = |z - \alpha| \dots\dots\dots ②$$

①を②に代入すると、 $|\frac{1}{w}| = |\frac{1}{w} - \alpha|$ 、 $\frac{1}{|w|} = \frac{|1 - \alpha w|}{|w|}$  となり、

$$|1 - \alpha w| = 1, \quad |-\alpha| |w - \frac{1}{\alpha}| = 1, \quad |w - \frac{1}{\alpha}| = \frac{1}{|\alpha|}$$

よって、点  $w$  の軌跡は、中心  $\frac{1}{\alpha}$  で半径  $\frac{1}{|\alpha|}$  の円である。ただし、 $w \neq 0$  より、原点は除く。

(2)  $x^3 = 1$  の解は、 $(x-1)(x^2+x+1) = 0$  より、 $x = 1, \frac{-1 \pm \sqrt{3}i}{2}$  である。

すると、条件より、 $\beta = \frac{-1 + \sqrt{3}i}{2}$ 、 $\beta^2 = \frac{-1 - \sqrt{3}i}{2}$  となる。

ここで、点  $\beta$  と点  $\beta^2$  を結ぶ直線は、(1)で  $\alpha = -1$  として表すことができるので、点  $z$  が点  $\beta$  と点  $\beta^2$  を結ぶ線分上を動くとき、

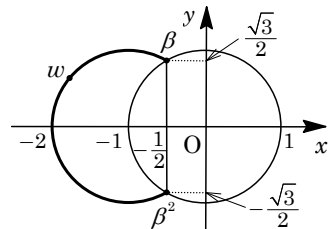
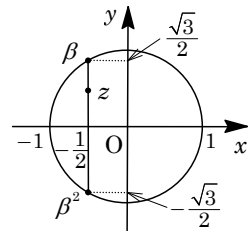
$$|z| = |z + 1| \dots\dots\dots ③, \quad |z| \leq 1 \dots\dots\dots ④$$

①③より、 $|w + 1| = 1$  ( $w \neq 0$ ) ……⑤

①④より、 $|\frac{1}{w}| \leq 1$  となり、 $|\frac{1}{w}| \leq 1$  から、 $|w| \geq 1$  ……⑥

⑤⑥より、点  $w$  の軌跡は、点  $-1$  を中心とする半径  $1$  の円周上で、原点を中心とする半径  $1$  の円の外部または周上の部分となる。

図示すると、右図の太線の弧である。ただし、両端点  $\beta$ 、 $\beta^2$  は含む。



[解説]

複素数平面上の変換を題材とした基本的な問題です。直線や円の絶対値による表現方法が問われています。

11

[北海道大]

(1) 原点  $O$ , 点  $A(\alpha)$ , 点  $B(\beta)$  を頂点とする  $\triangle OAB$  について,

$$\alpha \neq 0, \beta \neq 0, \alpha \neq \beta \cdots \cdots \textcircled{1}$$

このとき, 点  $P(z)$  は  $\triangle OAB$  の外心なので, 辺  $OA$  および辺  $OB$  の垂直二等分線の交点となり,

$$|z| = |z - \alpha| \cdots \cdots \textcircled{2}, \quad |z| = |z - \beta| \cdots \cdots \textcircled{3}$$

ここで,  $z = \alpha\beta$  を  $\textcircled{2}$  に代入すると,  $|\alpha\beta| = |\alpha\beta - \alpha|$  となり,  $\textcircled{1}$  から  $|\alpha| \neq 0$  より,

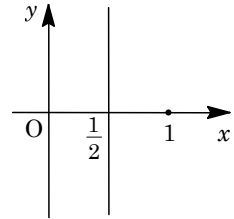
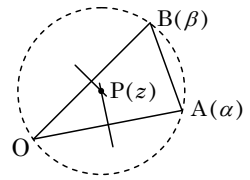
$$|\alpha||\beta| = |\alpha||\beta - 1|, \quad |\beta| = |\beta - 1| \cdots \cdots \textcircled{4}$$

同様に,  $z = \alpha\beta$  を  $\textcircled{3}$  に代入すると,  $|\alpha\beta| = |\alpha\beta - \beta|$  となり,  $\textcircled{1}$  から  $|\beta| \neq 0$  より,

$$|\alpha||\beta| = |\alpha - 1||\beta|, \quad |\alpha| = |\alpha - 1| \cdots \cdots \textcircled{5}$$

$\textcircled{4}\textcircled{5}$  より, 点  $A(\alpha)$ , 点  $B(\beta)$  は, ともに原点と点  $1$  を結ぶ線分の垂直二等分線上にある。ただし,  $\textcircled{1}$  から  $\alpha \neq \beta$  である。

以上より,  $\alpha$  の満たすべき条件は  $|\alpha| = |\alpha - 1|$  であり, 点  $A(\alpha)$  の描く図形は右図の直線である。



(2) (1) より,  $\alpha = \frac{1}{2} + ai$ ,  $\beta = \frac{1}{2} + bi$  ( $a \neq b$ ) とおくことができ,

$$z = \alpha\beta = \left(\frac{1}{2} + ai\right)\left(\frac{1}{2} + bi\right) = \left(\frac{1}{4} - ab\right) + \frac{1}{2}(a+b)i$$

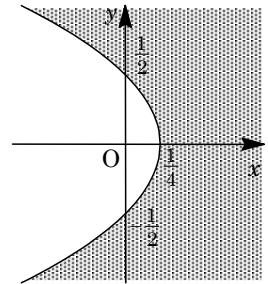
ここで,  $z = x + yi$  とおくと,  $x = \frac{1}{4} - ab$ ,  $y = \frac{1}{2}(a+b)$  となり,

$$a+b = 2y \cdots \cdots \textcircled{6}, \quad ab = \frac{1}{4} - x \cdots \cdots \textcircled{7}$$

$\textcircled{6}\textcircled{7}$  より,  $a, b$  ( $a \neq b$ ) は,  $t$  についての 2 次方程式  $t^2 - 2yt + \left(\frac{1}{4} - x\right) = 0$  の異なる実数解となり, その条件は,

$$D/4 = y^2 - \left(\frac{1}{4} - x\right) > 0, \quad y^2 > -\left(x - \frac{1}{4}\right)$$

よって, 点  $P(z)$  の存在範囲を図示すると, 右図の網点部となる。ただし, 境界は領域に含まない。



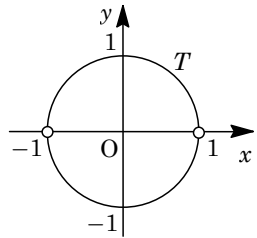
[解説]

複素数と図形に領域が絡んだ問題です。(1)は共役複素数を用いた形で,  $\alpha + \bar{\alpha} = 1$  を結論としてもよいでしょう。なお,  $O, A, B$  が一直線上にないということについては, (1)の結果から満たしていることがわかります。

12

[東京工大]

(1)  $f(x) = x^2 + cx + 1$  ( $c$  は実数) に対して、 $f(x) = 0$  の解がすべて  $T$  上にある条件は、2つの解がともに虚数で、しかも絶対値が1ということである。



そこで、解を  $x = \alpha, \bar{\alpha}$  とおくと、解と係数の関係から  $\alpha\bar{\alpha} = 1$  ( $|\alpha|^2 = 1$ ) となり、 $|\alpha| = 1$  は満たされている。

よって、求める条件は、解が虚数すなわち  $D = c^2 - 4 < 0$  から  $-2 < c < 2$  である。

(2)  $F(x) = x^4 + ax^3 + bx^2 + ax + 1$  ( $a, b$  は実数) に対して、 $F(x) = 0$  の解がすべて  $T$  上にあるとき、4つの解はすべて虚数で、しかも絶対値が1である。これより、解を  $x = \alpha, \bar{\alpha}, \beta, \bar{\beta}$  とおき、 $F(x)$  の  $x^4$  の係数が1であることに注意すると、

$$F(x) = (x - \alpha)(x - \bar{\alpha})(x - \beta)(x - \bar{\beta}) \\ = \{x^2 - (\alpha + \bar{\alpha})x + \alpha\bar{\alpha}\} \{x^2 - (\beta + \bar{\beta})x + \beta\bar{\beta}\}$$

ここで、 $\alpha\bar{\alpha} = |\alpha|^2 = 1$ 、 $\beta\bar{\beta} = |\beta|^2 = 1$  で、また  $\alpha + \bar{\alpha}$ 、 $\beta + \bar{\beta}$  はともに実数なので、それぞれ  $-c_1$ 、 $-c_2$  とおくと、 $F(x) = (x^2 + c_1x + 1)(x^2 + c_2x + 1)$  と表せる。

(3)  $F(x) = 0$  の解がすべて  $T$  上にあるための必要十分条件は、(1)(2)から、

$$F(x) = (x^2 + c_1x + 1)(x^2 + c_2x + 1) \quad (-2 < c_1 < 2, -2 < c_2 < 2)$$

すると、 $F(x) = x^4 + (c_1 + c_2)x^3 + (c_1c_2 + 2)x^2 + (c_1 + c_2)x + 1$  となり、

$$c_1 + c_2 = a \cdots \cdots \textcircled{1}, \quad c_1c_2 + 2 = b \cdots \cdots \textcircled{2}$$

①②より、 $c_1, c_2$  は2次方程式  $t^2 - at + (b - 2) = 0 \cdots \cdots \textcircled{3}$  の2つの解となる。

ここで、③の左辺を  $g(t)$  とおき変形すると、 $g(t) = \left(x - \frac{a}{2}\right)^2 - \frac{a^2}{4} + b - 2$  となり、

$g(t) = 0$  の解がともに  $-2 < t < 2$  から、求める条件は、

$$-\frac{a^2}{4} + b - 2 \leq 0 \cdots \cdots \textcircled{4}, \quad -2 < \frac{a}{2} < 2 \cdots \cdots \textcircled{5}, \quad g(-2) = 2 + 2a + b > 0 \cdots \cdots \textcircled{6}$$

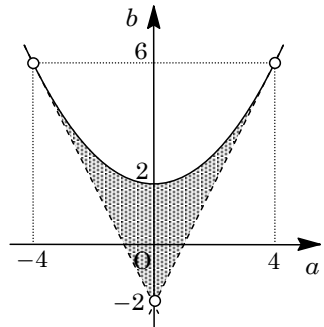
$$g(2) = 2 - 2a + b > 0 \cdots \cdots \textcircled{7}$$

④~⑦をまとめると、 $b \leq \frac{a^2}{4} + 2$ 、 $-4 < a < 4$

$$b > -2a - 2, \quad b > 2a - 2$$

点  $(a, b)$  の範囲を図示すると、右図の網点部となる。

ただし、実線の境界線のみ領域に含む。



[解説]

複素数と方程式の標準的な問題です。丁寧な誘導のため、結論に至る流れはスムーズです。

13

[千葉大]

(1)  $z = \cos \frac{2\pi}{9} + i \sin \frac{2\pi}{9}$  のとき,  $z^9 = \cos 2\pi + i \sin 2\pi = 1$  となり,

$$z^8 = \frac{1}{z} = \cos\left(-\frac{2\pi}{9}\right) + i \sin\left(-\frac{2\pi}{9}\right) = \cos \frac{2\pi}{9} - i \sin \frac{2\pi}{9}$$

すると,  $\alpha = z + z^8 = 2\cos \frac{2\pi}{9}$  となり,  $\cos \frac{2\pi}{9} = \frac{\alpha}{2}$  ……①

ここで, 3倍角の公式より,  $\cos \frac{2\pi}{3} = 4\cos^3 \frac{2\pi}{9} - 3\cos \frac{2\pi}{9}$  となるので, ①より,

$$-\frac{1}{2} = 4 \cdot \frac{\alpha^3}{8} - 3 \cdot \frac{\alpha}{2}, \quad -1 = \alpha^3 - 3\alpha, \quad \alpha^3 - 3\alpha + 1 = 0 \dots\dots\dots②$$

②より,  $\alpha$  は  $x^3 - 3x + 1 = 0$  の解なので,  $f(x) = x^3 - 3x + 1$  となる。

(2)  $f(x)$  を  $x - \alpha$  で割ると, ②から,  $f(x) = (x - \alpha)(x^2 + \alpha x + \alpha^2 - 3)$

すると,  $f(x) = 0$  の  $\alpha$  以外の 2 つの解は,

$$x = \frac{-\alpha \pm \sqrt{\alpha^2 - 4(\alpha^2 - 3)}}{2} = \frac{-\alpha \pm \sqrt{12 - 3\alpha^2}}{2} \dots\dots\dots③$$

ここで, ①から,  $12 - 3\alpha^2 = 12 - 3 \cdot 4\cos^2 \frac{2\pi}{9} = 12\sin^2 \frac{2\pi}{9}$  となるので, ③より,

$$\begin{aligned} x &= -\cos \frac{2\pi}{9} \pm \sqrt{3} \sin \frac{2\pi}{9} = 2\left(-\frac{1}{2}\cos \frac{2\pi}{9} \pm \frac{\sqrt{3}}{2}\sin \frac{2\pi}{9}\right) \\ &= 2\left(\cos \frac{2\pi}{3} \cos \frac{2\pi}{9} \pm \sin \frac{2\pi}{3} \sin \frac{2\pi}{9}\right) = 2\cos\left(\frac{2\pi}{3} \mp \frac{2\pi}{9}\right) \end{aligned}$$

よって,  $x = 2\cos \frac{4\pi}{9}$  または  $x = 2\cos \frac{8\pi}{9}$  となり, ①②より,

$$2\cos \frac{4\pi}{9} = 2\left(2\cos^2 \frac{2\pi}{9} - 1\right) = 4 \cdot \frac{\alpha^2}{4} - 2 = \alpha^2 - 2$$

$$\begin{aligned} 2\cos \frac{8\pi}{9} &= 2\left(2\cos^2 \frac{4\pi}{9} - 1\right) = (\alpha^2 - 2)^2 - 2 = \alpha^4 - 4\alpha^2 + 2 \\ &= \alpha(3\alpha - 1) - 4\alpha^2 + 2 = -\alpha^2 - \alpha + 2 \end{aligned}$$

以上より,  $f(x) = 0$  の  $\alpha$  以外の 2 つの解は,  $\alpha^2 - 2$ ,  $-\alpha^2 - \alpha + 2$  である。

### [解説]

複素数の極形式についての問題です。3倍角の公式がポイントになりますが, 問題文にその利用が暗示されています。また, 解と係数の関係を併用すると, 解答例が少し簡略になります。

14

[九州大]

まず、与えられた等式  $\alpha(|z|^2 + 2) + i(2|\alpha|^2 + 1)\bar{z} = 0$  に対して、

$$-i(2|\alpha|^2 + 1)\bar{z} = \alpha(|z|^2 + 2) \cdots \cdots \textcircled{1}$$

$$\textcircled{1} \text{の両辺に共役複素数をとると、} i(2|\alpha|^2 + 1)z = \bar{\alpha}(|z|^2 + 2) \cdots \cdots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1} \times \textcircled{2} \text{より、} (2|\alpha|^2 + 1)^2 z \bar{z} = \alpha \bar{\alpha} (|z|^2 + 2)^2 \text{となり、}$$

$$(2|\alpha|^2 + 1)^2 |z|^2 = |\alpha|^2 (|z|^2 + 2)^2, (2|\alpha|^2 + 1)|z| = |\alpha|(|z|^2 + 2)$$

$$|z| \text{についてまとめると、} |\alpha||z|^2 - (2|\alpha|^2 + 1)|z| + 2|\alpha| = 0 \cdots \cdots \textcircled{3}$$

(i)  $|\alpha| = 0$  ( $\alpha = 0$ ) のとき  $\textcircled{3}$ より  $|z| = 0$  となり、 $z = 0$  である。

(ii)  $|\alpha| \neq 0$  ( $\alpha \neq 0$ ) のとき  $\textcircled{3}$ より  $(|\alpha||z| - 1)(|z| - 2|\alpha|) = 0$  となり、

$$|z| = \frac{1}{|\alpha|}, |z| = 2|\alpha|$$

(ii-i)  $|z| = \frac{1}{|\alpha|}$  のとき  $|z|^2 + 2 = \frac{1}{|\alpha|^2} + 2 = \frac{1 + 2|\alpha|^2}{|\alpha|^2}$  となり、 $\textcircled{2}$ より、

$$z = \frac{\bar{\alpha}(|z|^2 + 2)}{i(2|\alpha|^2 + 1)} = \frac{\bar{\alpha}}{i(2|\alpha|^2 + 1)} \cdot \frac{1 + 2|\alpha|^2}{|\alpha|^2} = \frac{1}{i\alpha} = -\frac{i}{\alpha}$$

(ii-ii)  $|z| = 2|\alpha|$  のとき  $|z|^2 + 2 = 4|\alpha|^2 + 2 = 2(2|\alpha|^2 + 1)$  となり、 $\textcircled{2}$ より、

$$z = \frac{\bar{\alpha}(|z|^2 + 2)}{i(2|\alpha|^2 + 1)} = \frac{2\bar{\alpha}(2|\alpha|^2 + 1)}{i(2|\alpha|^2 + 1)} = \frac{2\bar{\alpha}}{i} = -2i\bar{\alpha}$$

### [解説]

複素数の計算についての問題です。題意は、与えられた等式から  $z$  を求めるわけですが、上の解答例では、 $z\bar{z} = |z|^2$  という関係式を用いて邪魔な  $\bar{z}$  を消去するという方針を立て、 $|z|$  についての方程式 $\textcircled{3}$ を導いています。

15

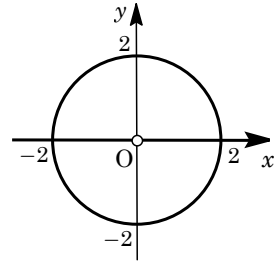
[北海道大]

(1)  $z \neq 0$  のとき,  $z + \frac{4}{z}$  が実数なので,  $z + \frac{4}{z} = \overline{z} + \frac{4}{z}$  となり,

$$\overline{z}z(z - \overline{z}) + 4(\overline{z} - z) = 0, (z - \overline{z})(z\overline{z} - 4) = 0$$

$$(z - \overline{z})(|z|^2 - 4) = 0$$

よって,  $z = \overline{z}$  または  $|z| = 2$  から,  $z$  は 0 でない実数または絶対値が 2 の複素数である。これを複素数平面上に図示すると, 右図の太線部となる。ただし, 原点は除く。



(2)  $k$  を実数とし, 方程式  $k(z + \frac{4}{z} + 8) = i(z - \frac{4}{z})$  ……① に対して, (1) から,

(i)  $z$  が実数 ( $z \neq 0$ ) のとき

$k(z + \frac{4}{z} + 8)$  および  $z - \frac{4}{z}$  は実数より,  $z - \frac{4}{z} \neq 0$  のときは①が成立しない。

すると,  $z - \frac{4}{z} = 0$  から  $z = \pm 2$  となり, このとき  $k = 0$  である。

(ii)  $z$  が  $|z| = 2$  を満たす虚数のとき

$z = 2(\cos \theta + i \sin \theta)$  ( $\sin \theta \neq 0$ ) と表せ,  $\frac{4}{z} = 2(\cos \theta - i \sin \theta)$  から,

$$z + \frac{4}{z} = 4 \cos \theta, z - \frac{4}{z} = 4i \sin \theta$$

①に代入すると,  $k(4 \cos \theta + 8) = -4 \sin \theta$ ,  $k = -\frac{\sin \theta}{\cos \theta + 2}$  ……②

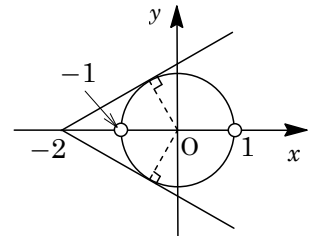
②から,  $-k = \frac{\sin \theta - 0}{\cos \theta - (-2)}$  と表せ,  $-k$  は原点が中心

の単位円周上の点  $(\cos \theta, \sin \theta)$  と点  $(-2, 0)$  を結ぶ線分の傾きとなる。

そこで,  $\sin \theta \neq 0$  に注意し, 右図の円の接線と  $x$  軸のなす角が  $\pm 30^\circ$  から,  $-\frac{1}{\sqrt{3}} \leq -k \leq \frac{1}{\sqrt{3}}$  ( $k \neq 0$ ) となり,

$$-\frac{1}{\sqrt{3}} \leq k \leq \frac{1}{\sqrt{3}} \quad (k \neq 0)$$

(i)(ii)より, ①が成り立つ  $k$  の値の範囲は,  $-\frac{1}{\sqrt{3}} \leq k \leq \frac{1}{\sqrt{3}}$  である。



[解説]

複素数についての総合的な問題です。(1)では「 $z$  が実数  $\Leftrightarrow z = \overline{z}$ 」に着目して数式処理をしています。また, (2)は①式の形から極形式を設定しました。なお, 後半は微分法の利用でも構いませんが, 上記の線分の傾きを対応させる方法も有名です。

16

[東北大]

- (1) 複素数  $\alpha$  に対し、複素数  $z$  の方程式  $z^2 - \alpha z + 2i = 0 \cdots \cdots \textcircled{1}$  について、 $z = 0$  では成立しないことより  $z \neq 0$  となり、 $\textcircled{1}$  より、

$$\alpha = \frac{z^2 + 2i}{z} = z + \frac{2i}{z} \cdots \cdots \textcircled{2}$$

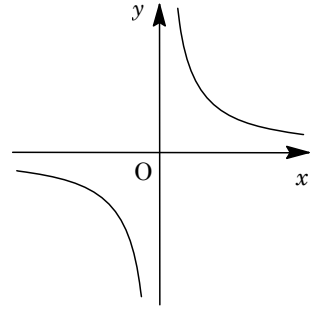
さて、方程式 $\textcircled{1}$ が実数解をもつとき、 $t$ を实数として $z = t$ を $\textcircled{2}$ に代入すると、

$$\alpha = t + \frac{2i}{t} \cdots \cdots \textcircled{3}$$

ここで、 $\alpha = x + yi$ とおくと、 $\textcircled{3}$ より、

$$x = t, \quad y = \frac{2}{t}$$

これより、点  $\alpha$  は複素数平面上で双曲線  $y = \frac{2}{x}$  を描く。



図示すると、右図のようになる。

- (2) 方程式 $\textcircled{1}$ が絶対値 1 の複素数を解にもつとき、 $\theta$  を実数として、 $z = \cos \theta + i \sin \theta$ とおくと、 $\frac{1}{z} = \cos(-\theta) + i \sin(-\theta) = \cos \theta - i \sin \theta$

$\textcircled{2}$ に代入すると、 $\alpha = \cos \theta + i \sin \theta + 2i(\cos \theta - i \sin \theta)$ から、

$$\alpha = (\cos \theta + 2 \sin \theta) + i(2 \cos \theta + \sin \theta) \cdots \cdots \textcircled{4}$$

さて、点  $\alpha$  を原点を中心に  $\frac{\pi}{4}$  回転させた点  $\beta$  は、

$$\beta = \left( \cos \frac{\pi}{4} + i \sin \frac{\pi}{4} \right) \alpha = \frac{\sqrt{2}}{2} (1 + i) \alpha \cdots \cdots \textcircled{5}$$

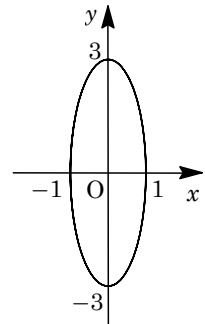
$\textcircled{4}$  $\textcircled{5}$ より、 $\beta = \frac{\sqrt{2}}{2} (1 + i) \{ (\cos \theta + 2 \sin \theta) + i(2 \cos \theta + \sin \theta) \}$ となり、

$$\begin{aligned} \beta &= \frac{\sqrt{2}}{2} \{ (-\cos \theta + \sin \theta) + 3i(\sin \theta + \cos \theta) \} \\ &= \frac{\sqrt{2}}{2} \{ -\sqrt{2} \cos \left( \theta + \frac{\pi}{4} \right) + 3\sqrt{2}i \sin \left( \theta + \frac{\pi}{4} \right) \} \\ &= -\cos \left( \theta + \frac{\pi}{4} \right) + 3i \sin \left( \theta + \frac{\pi}{4} \right) \cdots \cdots \textcircled{6} \end{aligned}$$

ここで、 $\beta = x + yi$ とおくと、 $\textcircled{6}$ より、

$$x = -\cos \left( \theta + \frac{\pi}{4} \right), \quad y = 3 \sin \left( \theta + \frac{\pi}{4} \right)$$

これより、点  $\beta$  は複素数平面上で楕円  $x^2 + \frac{y^2}{9} = 1$  を描く。図示すると、右図のようになる。



### [解説]

複素数平面上の軌跡に関する問題です。点  $\alpha$  や点  $\beta$  の軌跡を求めるので、与えられた $\textcircled{1}$ ではなく、変形した $\textcircled{2}$ をもとに計算を進めています。



17

[熊本大]

(1) 複素数平面上で、 $A(i)$ 、 $B(-i)$ 、 $P(z)$  とおくと、 $|z+i|-|z-i|=1$  より、

$$BP - AP = 1$$

すると、点  $P$  の描く図形  $H$  は 2 点  $A, B$  を焦点とする双曲線である。

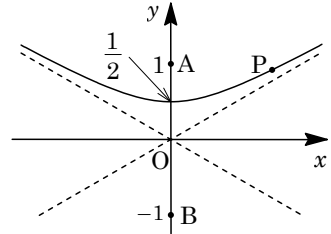
ここで、 $z = x + yi$  とおき、 $H: \frac{x^2}{a^2} - \frac{y^2}{b^2} = -1$  とすると、 $c=1$  かつ  $2b=1$  で、

$$a = \sqrt{c^2 - b^2} = \sqrt{1 - \frac{1}{4}} = \frac{\sqrt{3}}{2}$$

これより、 $H: \frac{4x^2}{3} - 4y^2 = -1$  となり、漸近線は、

$$y = \pm \frac{b}{a}x = \pm \frac{1}{\sqrt{3}}x$$

ただし、 $BP > AP$  より  $y > 0$  であり、図形  $H$  を図示すると右図の曲線となる。



そして、2本の漸近線と実軸の正の向きとのなす角が  $\pm \frac{\pi}{6}$  より、 $z$  の偏角  $\theta_1$  のとり

うる値の範囲は、 $0 \leq \theta_1 < 2\pi$  で考えると、 $\frac{\pi}{6} < \theta_1 < \frac{5}{6}\pi$  である。

(2)  $w = \frac{1}{z}$  のとき、 $n_2 = |w| = \frac{1}{|z|}$  となり、(1)より  $|z| \geq \frac{1}{2}$  なので  $0 < n_2 \leq 2$  である。

また、 $n$  を整数として、 $\theta_2 = \arg w = \arg \frac{1}{z} = 2n\pi - \arg z = 2n\pi - \theta_1$  より、

$$2n\pi - \frac{5}{6}\pi < \theta_2 < 2n\pi - \frac{\pi}{6}$$

$0 \leq \theta_2 < 2\pi$  より  $n=1$  として、 $\frac{7}{6}\pi < \theta_2 < \frac{11}{6}\pi$  である。

### [解説]

双曲線の絡んだ複素数と図形の基本的な問題です。(1)は、 $x$  と  $y$  を用いて絶対値の計算を行っても構いません。

18

[筑波大]

(1) 3点  $O(0)$ ,  $A(\alpha)$ ,  $B(\alpha^2)$  に対して,  $\triangle OAB$  は直角三角形より,

(a)  $\angle AOB = \frac{\pi}{2}$  のとき  $\arg \alpha = \theta$  とおくと  $\arg \alpha^2 = 2\theta$  となり,  $n$  を整数として,

$$2\theta - \theta = \frac{\pi}{2} + n\pi, \quad \theta = \frac{\pi}{2} + n\pi$$

ところが, これは  $\alpha$  が純虚数でないことに反する。

(b)  $\angle OBA = \frac{\pi}{2}$  のとき 辺  $OA$  が斜辺となるので,  $OA > OB$  となり,

$$|\alpha| > |\alpha^2| = |\alpha|^2, \quad 1 > |\alpha|$$

ところが, これは  $|\alpha| > 1$  に反する。

(a)(b)より,  $\angle OAB = \frac{\pi}{2}$  である。

(2)  $\angle OAB = \frac{\pi}{2}$  より,  $OB^2 = OA^2 + AB^2$  となり,

$$|\alpha^2|^2 = |\alpha|^2 + |\alpha^2 - \alpha|^2$$

すると,  $\alpha^2 \bar{\alpha}^2 = \alpha \bar{\alpha} + (\alpha^2 - \alpha)(\bar{\alpha}^2 - \bar{\alpha})$  から,

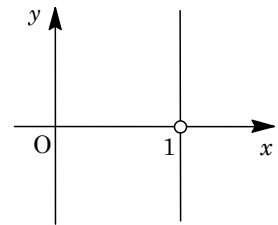
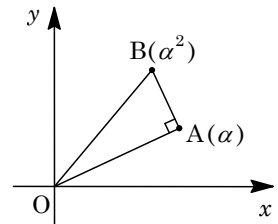
$$\begin{aligned} \alpha^2 (\bar{\alpha})^2 &= \alpha \bar{\alpha} + (\alpha^2 - \alpha) \{ (\bar{\alpha})^2 - \bar{\alpha} \} \\ &= \alpha \bar{\alpha} + \alpha^2 (\bar{\alpha})^2 - \alpha^2 \bar{\alpha} - \alpha (\bar{\alpha})^2 + \alpha \bar{\alpha} \end{aligned}$$

これより,  $2\alpha \bar{\alpha} - \alpha^2 \bar{\alpha} - \alpha (\bar{\alpha})^2 = 0$  となり,

$$\alpha \bar{\alpha} (2 - \alpha - \bar{\alpha}) = 0$$

$\alpha \bar{\alpha} > 0$  より,  $2 - \alpha - \bar{\alpha} = 0$  となり,  $\frac{\alpha + \bar{\alpha}}{2} = 1$

よって,  $\alpha$  の実部は 1 となるので,  $\alpha$  全体を図示すると右図の直線である。ただし,  $\alpha = 1$  は除く。



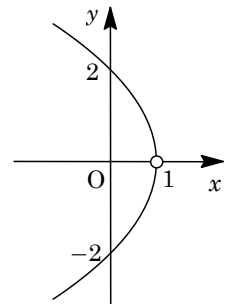
(3) (2)より, 0 でない実数  $k$  をとり,  $\alpha = 1 + ki$  とおくと,

$$\alpha^2 = (1 + ki)^2 = 1 - k^2 + 2ki \quad (k \neq 0)$$

ここで,  $\alpha^2 = x + yi$  なので,  $x = 1 - k^2$ ,  $y = 2k$  となり,

$$x = 1 - \frac{y^2}{4} \quad (y \neq 0)$$

よって, 点  $(x, y)$  の軌跡を図示すると, 右図の放物線となる。ただし, 点  $(1, 0)$  は除く。



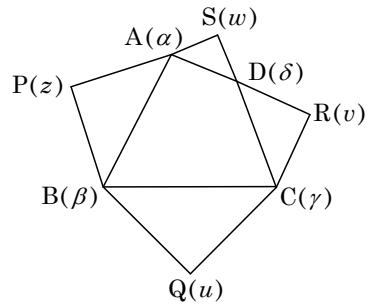
[解説]

複素数と図形についての標準的な問題です。(2)はいろいろな方法が考えられますが, 解答例では三平方の定理を利用しました。

19

[広島大]

- (1) 複素数平面上で、 $A(\alpha)$ 、 $B(\beta)$ 、 $C(\gamma)$ 、 $D(\delta)$ を頂点とする四角形  $ABCD$  に対し、その外側に 4 辺  $AB$ 、 $BC$ 、 $CA$ 、 $DA$  をそれぞれ斜辺とする直角二等辺三角形  $APB$ 、 $BQC$ 、 $CRD$ 、 $DSA$  を作る。このとき、 $P(z)$ 、 $Q(u)$ 、 $R(v)$ 、 $S(w)$  とおく。



すると、 $P$  は  $B$  を中心に  $A$  を  $\frac{\pi}{4}$  回転し、距離を

$\frac{1}{\sqrt{2}}$  倍したものとなり、

$$z - \beta = \frac{1}{\sqrt{2}} \left( \cos \frac{\pi}{4} + i \sin \frac{\pi}{4} \right) (\alpha - \beta) = \frac{1+i}{2} (\alpha - \beta)$$

よって、 $z = \frac{1+i}{2} \alpha + \frac{1-i}{2} \beta$  である。

- (2) (1)と同様にして、 $u = \frac{1+i}{2} \beta + \frac{1-i}{2} \gamma$ 、 $v = \frac{1+i}{2} \gamma + \frac{1-i}{2} \delta$ 、 $w = \frac{1+i}{2} \delta + \frac{1-i}{2} \alpha$

さて、四角形  $PQRS$  が平行四辺形であるための必要十分条件は、

$$\frac{z+v}{2} = \frac{u+w}{2}, \quad z+v = u+w$$

すると、 $\frac{1+i}{2} \alpha + \frac{1-i}{2} \beta + \frac{1+i}{2} \gamma + \frac{1-i}{2} \delta = \frac{1+i}{2} \beta + \frac{1-i}{2} \gamma + \frac{1+i}{2} \delta + \frac{1-i}{2} \alpha$

$$i\alpha - i\beta + i\gamma - i\delta = 0, \quad \alpha + \gamma = \beta + \delta \cdots \cdots (*)$$

よって、 $\frac{\alpha + \gamma}{2} = \frac{\beta + \delta}{2}$  となり、四角形  $ABCD$  は平行四辺形である。

- (3) 四角形  $PQRS$  が平行四辺形であるとき、(\*)より  $\delta = \alpha - \beta + \gamma$  となり、

$$\begin{aligned} w - z &= \frac{1+i}{2} \delta + \frac{1-i}{2} \alpha - \frac{1+i}{2} \alpha - \frac{1-i}{2} \beta \\ &= \frac{1+i}{2} (\alpha - \beta + \gamma) + \frac{1-i}{2} \alpha - \frac{1+i}{2} \alpha - \frac{1-i}{2} \beta = \frac{1-i}{2} \alpha - \beta + \frac{1+i}{2} \gamma \end{aligned}$$

また、 $u - z = \frac{1+i}{2} \beta + \frac{1-i}{2} \gamma - \frac{1+i}{2} \alpha - \frac{1-i}{2} \beta = -\frac{1+i}{2} \alpha + i\beta + \frac{1-i}{2} \gamma$  から、

$$i(u - z) = -\frac{i+i^2}{2} \alpha + i^2 \beta + \frac{i-i^2}{2} \gamma = \frac{1-i}{2} \alpha - \beta + \frac{1+i}{2} \gamma$$

よって、 $w - z = i(u - z)$  となり、すなわち  $S$  は  $P$  を中心に  $Q$  を  $\frac{\pi}{2}$  回転したもの

となるので、 $PS = PQ$  かつ  $\angle QPS = \frac{\pi}{2}$  より四角形  $PQRS$  は正方形である。

[解説]

複素数と図形に関する頻出問題です。なお、(2)の平行四辺形については、「2本の対角線が互いに他を二等分する」という条件を利用しています。